部報
心・技・体
岡崎市小中学校体育部
２０２１．１０．２９
№１８０

「ONE TEAM」

岡崎市立常磐南小学校　大山 幸恵

４月、新学期とともに部活動も始まり、子どもたちとの会話の中に「今年は部活で勝ちたい。」という声が聞かれた。昨年度赴任した当時は、部活動に力を注いでいるとは言い難く、どちらかというと体力作りを中心とした雰囲気であったため、その発言に内心驚いた。小規模校であるが故、競争心が乏しく穏やかな子どもたちから勝利への欲求を感じられたことを喜ばしく思い、陸上部の今年度の具体的な目標を男女総合入賞と定めた。

大会当日。会場の雰囲気にのまれないか心配したが、こちらの予想を上回る結果を出す子どもたちに驚かされた。そんな中、５年生のある女子選手がスタート直後に大転倒した。周りの役員だけでなく、観客席からも悲鳴が聞こえる。その瞬間、選手と目が合った。その目からは、悲愴感ではなく不屈の闘志が見られ、即座に立ち上がり駆け出す姿に胸が震えた。ゴールは最後であったが、最後まで諦めることなく堂々と走り切った姿に感動した。

それぞれの頑張りにより、目標であった男女ともに総合５位を果たすことができた。帰校後、最後のミーティングで今日の自分の評価を問うと、多くの子どもが満足していた。今回、会場へ来られなかった仲間への感謝を口にするなど、今まで見られなかった仲間を称える心の成長を実感した。しかし下級生は違った。他校の選手に競り負けるという経験をし、悔しさをにじませていたのだ。転倒してしまった彼女も、先輩の持つ賞状を目に焼き付け、来年こそはと誓っていた。この思いは次への成長の大きな糧になり、さらに子どもたちを成長させる原動力になると信じている。そして上級生の勝利への思いも下級生に受け継がれていくのだと感じた。

最後に、大会運営にあたってくださった先生方に心から感謝を述べたいと思います。コロナウイルス対策だけでなく天候にも悩まされる中、臨機応変に対応してくださり、無事に大会を終えることができたのだと思います。ありがとうございました。

「本気の思いで」

岡崎市立城南小学校　松﨑 俊介

「目標に向かって、自分で何をすべきか考えて、本気で行動をしよう。」サッカー部の子供たちには、例年この言葉をかけている。部活動を通して、技術だけでなく、この先の生活で生かしていける力を身につけてほしいと願っているからだ。今年度は、特にコロナ禍の中でも前向きにサッカーに取り組んでほしいと思っていた。

大会までの日々、子供たちは本当によく頑張ってきた。目標を決め、練習では、少しでも時間を大切にしようと、準備や片付けを全員で走って行った。夏休みには、キャプテンを中心に自ら練習カードを作り、部員全員が自主練習に励んだ。学校の近くの公園には、日が暮れるまでひたむきにサッカーに向き合う子供の姿があった。

選手激励会の数日前のこと。休み時間にも関わらず、運動場にサッカー部全員が集まっていた。応援してくれる人の思いに応えようと、誰に言われるでもなく、決意表明の練習をしていた。大会に向けてできることを考え、一生懸命に実行する選手の姿に胸が熱くなった。顧問として、このチームを心から応援したいと思った。

最初で最後の大会。キックだって、ドリブルだってまだまだだ。でも、子供たちは一生懸命で、泥臭く、熱く、最後まで絶対にあきらめない。今までの努力をすべて出し切った子供たちは輝いていた。「この２年半、思うように活動ができずとも、自分たちなりに努力してきたんだ」ということを必死で戦う姿が物語っていた。

結果は一回戦敗退。全力で戦った子供たちから涙がこぼれた。「こんなに本気で泣けるなんて素晴らしいことじゃないか。本気で努力をしてこなかったら、涙が出るくらいの悔しさだって味わえないよ。すてきなサッカーをありがとう」。私は子供たちに向け、感謝の言葉が自然と溢れ出た。

心が動く瞬間こそ、人は成長できると信じている。結果は目標に届かず、悔しかっただろう。しかし、自分たちでよく考えて取り組んできた２年半の努力があったからこそ、心を震わせ、本気で泣ける経験ができたのではないだろうか。そんな本気の思いで活動ができた城南小サッカー部の子供たちを、私は心から誇りに思う。

最後にこのような機会を作ってくださった体育部をはじめとする大会関係者の皆様には、心から感謝しています。子どもたちのために本当にありがとうございました。

「新人戦で見えた大切なもの」

岡崎市立南中学校　鈴木 智記

８月、新チームが動き出した直後、本校の野球部主将から「新人戦はできますか。」と質問された。その時点では、夏休み後半の部活動の休止、協会の大会の延期が決まっており、今年度は新人戦も開催できないかもしれないというあきらめにも近い気持ちが伝わってきた。その質問に対し、私自身開催ができるのだろうかという大きな不安があり、主将の不安を拭い去る返答をすることはできなかった。家での自主練習メニューに加え、マスク着用、手洗い、ソーシャルディスタンスをもう一度徹底するように伝えた上で、「今できることを精一杯やろう」そう伝えるのが精一杯であった。

そんな中、開催されることになった新人戦。「今まで以上にコロナ対策を講じていきましょう。」という体育主任会での緊張感ある言葉に、身の引き締まる思いであるのと同時に、主将に対し「開催できるぞ」と伝えられる安堵に近い喜びを感じた。

新人戦の結果は２回戦敗退。試合を振り返った主将が口にしたのは、「悔しい。でも、新チームで試合ができてよかった。」という悔しさと嬉しさの入り混じった言葉だった。しかし、そこには３年生から２年生に引き継がれた部活動からしか学ぶことのできない「大切なもの」が感じられた。

コロナ禍という大変難しい状況の中ではあったが、大会が開催されたことで、生徒たちの成長を目の当たりにすることができた。運営等に携わった関係者の方、熱い想いで取り組む選手、温かく見守る保護者の方々に感謝するとともに「部活動って素敵だな。」と改めて感じる新人戦となった。

「思いを重ねて」

岡崎市立新香山中学校　佐宗 敬泰

キャプテンのＡは、３年生がいた時からレギュラーとして活躍していた。試合での経験値も高く、練習中に率先してチームのために動くことができることなどから、新チーム発展のためにキャプテンに指名した。Ａはキャプテンになってから、うまくいかない生徒には、１年生も含めて、どのようにしたらいいか率先して声を掛け、先輩たちが今まで作り上げてきた「チーム新香山」としての熱量を途切れさせないために、誰よりも声を出して日々の練習に取り組んだ。そんなＡを見て、「新チームになってからＡはよく頑張っているね」と声をかけてくれる先生が何人もいた。

緊急事態宣言が解除され、部活動が再開された時、私は以前までとのチームの雰囲気に違いを感じた。部活動ができなかったことへの悔しさ、みんなで集まってバレーボールがしたいという思いから、練習への集中力や気迫が増していた。これは今までＡがチームのために声を掛け続けてきたからであろう。練習試合もよい雰囲気で行うことができる場面が多く、上り調子で大会を迎えることができた。

しかし、新人戦の結果は１回戦敗退。緊張感のある雰囲気の中、練習試合で出すことのできたプレーや雰囲気は思うように出ず、自分たちのバレーボールができないまま終わってしまった。控え室に戻り、Ａが周りに気付かれないように静かにタオルに顔をうずめ、悔しさに耐えていた姿が今でも頭から離れない。これだけチームのために率先して動いてきたＡ、そしてそれに応えようとしてきた生徒たちに、どうかいい思いをさせてあげたい。

私は過去に先輩から、「試合は練習でやってきていないことで負けるんだよ」と話してもらったことがある。まさにその通りだった。この大会を振り返っても、技能面、緊張の中で力を発揮しなければいけない精神面など、まだまだ生徒たちに指導しきれていなかったことがたくさんあるように思った。これから１年間、あの子たちとともに必死で努力し、これからの大会に備えていきたい。

最後に、コロナ禍の中、たくさんの方々の思いやご協力によって、生徒たちが輝ける機会をいただけたことに感謝いたします。ありがとうございました。